

---

# [らきすた]かがみとイチャラブ[かがみん]

龍牙

---

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「らきすた」かがみとイチャラブ「かがみん」

### 【ZZマーク】

ZZ855M

### 【作者名】

龍牙

### 【あらすじ】

らきすたの登場人物「柊 かがみ」をメインヒロインとして、かがみに彼氏が出来たらこんな感じじゃね、と言つお話し

ひたすらイチャラブします（予定）

## 馴れ初め（前書き）

初めまして m(ーー) m  
右も左もわからない初心者です

これを読んで、気付いた点、直した方がいいところ、アドバイス、  
感想、などありましたら教えて下さい

## 馴れ初め

「じゃあちょっと買い物しに行つてくるわね～」

そう言つては私は家を出た。

今日は、こなたもみゆきも何か用事があるらしくて一緒に遊びに行けないらしい…

仕方なく勉強していた私は、勉強の息抜きにと、特に誰かと遊ぶ訳でもなく少し買い物に行く事にした。

「ん～～～、ほんと今日はいい天気ねえ。」

外に出た私は、雲がところどころに見える程度の青空の下で何気なくそう咳いていた。

「つかさも一緒に来れば良かつたのに。」

つかさは何かやる事があるらしくてどうしても今日は行けないらしい。多分宿題でも大量に出されたんだろうけど。

「帰つたら少し手伝つてやるか。」

そんな風に些細な事を考えながら、天気が良かつた事もあり、電車で少し遠くまで買い物に行く事にした。

『あー、ついてないなあ。電車に乗る時は空いていたのに…』

電車に乗つた時は少しの人が吊革に捕まつて立つてゐるだけだったのに、次の駅で人が大量に流れ込んで来て満員になつてしまつた。

『これじゃあつかさは来なくて正解だつたかも。それにしても早く着かないかなあ』

と扉の近くに押し付けられる様にいた私は、そんなため息をついて

いた。そしたら、

「 つ！」

太股を撫でられた気がして息を呑んだ。

『ち、痴漢？ ま、まさかそんな事ないわよね…。あ、きっとこんなに混んでるんだから手が当たつただけよね！』と自分に言い聞かせていると…

「 つ！？』

今度ははつきりとお尻を撫で回してきたのが分かつた

『ま、まさか本当に？ どうしたらしいのよ？』

痴漢にあつた事がなかつた私は突然の事でパニクつてしまい、何も出来ずにいた。

『ちよつ！ ほんとどうすればいいのよ！？』

訳が分からなくなつてしまつた私は不安と初めてあつ痴漢に対する怖さで身をこわばらせて涙ぐんでしまつていて。

そんな時に、不意に横から手を引かれて、いつの間にか着いていた知らない駅に誰かに手を握られ、そのままホームに降りていた。いきなりの事で放心していた私は、電車の扉が閉まり出発するのを見送つて暫くしてから、ようやく冷静になり誰かに助けてもらつたのだと理解した。

『一体誰が？』と思い振り向こうとする前に

「 エ、大丈夫か？ なんか何かに耐えてるみたいだつたから、もしかして痴漢かと思つてここに降りたけど、間違つてないか？ もし違かつたら悪い…」

それに対しても私は

「 だ、大丈夫よ。助けてくれてありがとう。」

と言いつつも私は、私の事を「 エ」と呼んだこの人が誰だかわからぬいでいた。

私が不思議そうな顔をしていたせいか、男は

「 えつと、もしかして俺の事憶えてない…？」

「 え、えつとそんな事ないわよ。えつと、あれでしょ、その…」

「…………」

助けてくれた彼は期待するように私を見ていたが…

「う…………ごめんなさい」

思い出せない私は、なんとか取り繕うとこりこり言つていたら、助けてくれた彼が期待する様にじつと視られていたら、気まずくなつて謝つてしまつた。

「はは……、やつぱりか…。あの頃は違うクラスにばかり行つてたから、どつちのクラスが分からなくなつそうながら一だつたらなあ…」

彼は苦笑しながらそつと言つた

「え、つて事は…」

「そう、おんなんじ高校の一年の時のクラスメイトだよ…」  
と彼は苦笑を漏らしていた…

「そ、そつだつたんだ…。ははは…」

「…………」

「う…………ほんどうめんなさい…」

「はは…、いいよいこよ。一応予想はしていたからね。」

「う、やつぱり他の人から見るとそつなんだ…」

「まあ、ね。んじゅ一応自己紹介しとくよ。一年の時一緒にクラス  
だつた「日比野 龍」だよ。」

『そう言えば聞いた事あるかも…』

なんて考えていたら、

「ところで終はこれからどつする？電車に乗つてたつて事はどうかに用事でもあつた？」

「あ、え、ええと。そつね…。暇だから買い物でも行こうと思つてたんだけど…。こんな事もあつたから今日は帰るつかな」と言つと

「んじゅ家まで送るよ。また何かあつたら大変だしね。」

なんて事を言い出した。

「べ、別にいいわよ！これ以上あなたに迷惑かけられないし…」

「そいつか？俺は別に迷惑でもないんだけど。それに今の時間じゃ結構電車混むけどほんと一人で大丈夫か？」

「え、ほんとに？」

「うん、そうだよ。結構微妙な時間だけ何故だか混むんだよなあ。

」  
それを聞いた私は『もし、またあんな事されたら』と思いつと段々と怖くなってきた。

そしたら彼が

「な、だから送つてやるよ。なんか一人じゃ不安そつだしな」

「なあ つ、べ、別に不安でもなんでもないわよ。ただあんたに迷惑かけたくないだけで…」

「本当に？」

「ほ、ほんとよ…」

「そう言われても、なあ・・・」

そう彼に言われて、彼の目線を辿つてほつと気付いた。

『そついえばさつきから私ずっと手を繋いだままで…』

「ほり、やつと気付いた。……まあ別に嫌じゃなかつたから言わなかつたけど…。』

「な、なあつ つ？」

いきなりそんな事を言われて恥ずかしくて真っ赤になつて、繋いだ手を急いで離した。

「まあ、電車も来たみたいだし、さつさと行こいつか。駅は 駅まででいいかな？」

まだ顔から赤みのとれてない私をよそに彼は、また私の手を取つて丁度来た電車に乗り込んでしまつた。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよね！？」

「あれ、駅違つたか？」

「そ、そつじやなくて…。間違つてはいけど…。つて、あんたはなんで駅分かるの？」

「ああ、そりや終が電車に乗つて来るの見たからだけど？俺の使つ

てる駅つて、柊が使つてる駅の一つ前の駅だから電車が混む前に見えたつてだけだよ。」

「あ、そ、そ、そ、う、だ、つ、た、ん、だ、…」

そう彼は言いながら私の手を引いて、座席が空いてる所がないか見て、席に空きがない事を確認したら、私の使つている駅の出入口となるドアの近くに行き

「まあ、そういう事。…お、出発するみたいだな

彼がそう言つて、ゆっくりと電車は出発した

## 電車の中で

電車に乗り込んでから、いくつかの駅を過ぎた時には、彼の言つ通りに電車は、多少スペースはあるが、満員になってしまった。

「ほり、言つた通りだろ」

「本当だ…」

『確かにこれぐらい混むなら一人じゃ不安だったかも…』

と思つていたら

「な、俺が居て良かつたろ?」

彼が少し笑みを浮かべながらそう言つた

「そ、そんな事ないわよーな、なに言つてんのよー。」

彼は私の内心を知つてか知らずか、そんな事を言つてくるので私は肯定するのが恥ずかしくて、慌てて否定していた。

「そういえば、昨日わあ…………」

彼は私の気を紛らわそうとしているのか、会話が絶えない様に話しかけてくれていた。

暫く彼とどうでもいい事を話し合つていたら

「おつと、次の駅に着くみたいだな。となると、あと20分位で

駅に着くかな。」

「そうね。それぐらいだと思つ

そして電車がプシューーと何かの空気が抜ける様な音がして電車が止まつた。

「あー、こりゃヤバいかも…」

彼がいきなり溜息混じりにつぶやいていた

「?、どうしたのよ?」

私は気になつて問い合わせると

「まあ落ち着いたら説明するから、ちょっとこいつち

そう言つて手を引っ張られた

「え、ちょ、ちょっと！」

彼はそう言つと私の手を引っ張つてドアと座席の仕切りの角に私を引っ張り込んで、私が動けない様にドアと仕切りに手を付いて向き合つた。

「な、な、な、なななな！？」

『い、い、一体なんのつもりなの!? 私、彼に何かした!? 何かおかしな事でも言つたのかしら! ? で、でもいきなりこんな事…』

と混乱していろいろ考えていたら、電車のドアが空いて、大勢の人々が電車の中に雪崩込んで来て、残っていたスペースもなくなつて、ぎゅうぎゅう詰めの状態になつてしまつた。

私を除いては。

『え、ど、どうなつてるの?』

少しするとドアが閉まり電車は出発した。

「まあ、こう言つ事だよ。」

苦笑交じりに彼はそう言つた

「え? な、何が…」

あまりこの状況を理解出来ていらない私はそんな事しか言えなかつた。  
「まあ確かにいきなりだつたからね。つとと。んと、理由を話すと、思い返したくもないと思つけどこの電車に乗つてる理由つて、終にあんな事があつたからだろ。」

「そ、そうね…」

「それで、だ。今は俺も一緒にいるから、あんな事なこと思つけど今の状態…」

そう言つて彼は田線を自分の後ろにやつて見る様に促してから  
「こんなんだから、必ずしもとは言えないけど、誰がの手がどこかに当たる可能性があると思う。そうなると、さつきの事もあるしさすがの終でも勘違いしちゃうだろ。」

「た、確かにそうかも…」

「な、だろ。だからちょっと変な形になつたけど、これならひょ

とだけ終の所に余裕できるしな。まあ、なにも言わないでいきなり手引っ張つたりして悪いな。」

「べ、別にいいわよ。……それ」「……たしの……め」「してくれ

……だし……」

『わ、私の事考えて行動してくれたんだ。や、やつぱり「ありがとう」ぐらい言つた方がいいのかしら? でもやつぱり恥ずかしいし……』

「?。それに、何? 周りうるさくてよく聴こえなかつたんだけど?」「な、何でもないわよ!」

「?。まあそれなら別にいいけど……」

『い、いきなりき、聞き返さないでよね! お礼言つ、いいタイミングだつたのに……』

そんな私の気持ちを知らない彼はただ頭に「?」を浮かべているだけだった。

その後彼は何か気付いたみたいに、また私に話しかけてきた。

「あ、でも何かあつたら直ぐ教えてな。出来る限りなんとかするから。」

「わ、わかつたわ。」

「まあ、後10分ぐらいで着くだらうけどね。」

「そ、そうね。」

残り後10分程だとわかつた私は、気が緩み愚痴を洩らし始めた。

「はあ、今日は最悪な日だつたわ……。買い物になんか出掛けないで家にいれば良かったのに……。つかさの宿題でも手伝つてればあんな目に遭わなかつたんだろうな……。」

「まあ、そりや仕方ないよ。生きてればそんな風に思う事、何回もあるだろうし。」

彼は律儀にも私の愚痴も聞いてくれていた。

そんな彼を見て、ふと気付いた。

『そういえば、電車に乗つっていたつて事は、どこかに行く予定があ

つたんじゃないのかしら？それなのに、私なんかに付き合わさせて

…』

そう思うと彼に悪い事をした気がして

「そういえば、あんた電車に乗つてたつて事は、何か用事があつたんじやないの？」

「ああ、特に用事とかあつた訳じやないよ。終と似たようなもんで、暇だつたからなんか新しい本とか買いに行こうかなあつて思つて出掛けただけだから。」

「そうなんだ。でも悪いわね、私なんかに付き合わせちやつたりして。」

「いや、そんな事気にしてないよ。むしろ、終と話を出来たから出掛けで良かつたと思ひつよ。」

「なあっ　！？」

彼が軽く笑いながらそんな事言つから、私は真つ赤になつてうつ向いてしまつた。

「ん、どうした。気分でも悪く　うわっと…？」

「…え？　ひやあっ！？」

私は、彼が驚いた様な声を出したから、どうしたのか聞こいつと、顔をあげようとしたら思わず高い声を出したしまつた。

丁度そこはカーブになつていて、電車が横に動いた為、乗客の一人が私のいる方に倒れ込んでしまつたのだ。そう、彼を押す様によつて、彼は私のいる方に押し付けられる事になつたのだ。

私達のとつていた体勢が体勢なので、はたから見ると丁度密着して抱き合つてゐる状態になつてしまつたのだ。

勿論私は、異性に抱きつかれた、抱きついた事などなく、あつたとして幼少時代に父親相手にしたかもしけない、つて程度だったので、状況が状況だが初めての異性からの抱擁に戸惑うしかできなかつた。「つと、大丈夫か終？いきなりだつたからどうか打つたりしてないか？」

「…　っ！」

私は息を飲んだ。声をかけられ、はっとして彼の顔を反射的に見たら、彼の顔が目の前にあつたからだ。

『ど、ど、どうしてこんな状況になつてゐるのよつー? あ、あと少し近づいたら、き、キ、キスしちゃいそくな…』

「終、終つてば」

「ひや、ひやい!」

変な事を考えていたせいで、彼から話しかけられた時声が裏返つてしまつた。

「ほんと何処も打つてないか? サツキからうつ向いていたけど…」

「だ、大丈夫だから! ほ、ほんと大丈夫だから気にしないで!」

「ならいいけど。」

『ほつ…』

その後すぐに目的の駅に着いたので、彼にお礼と軽い挨拶をして別れた

## 電車の中（後書き）

学校の課題が多くなかなか更新できませんでしたorz  
感想お待ちしています^ ^

## 設定

### 時間系列

かがみ達がまだ高校の三年生になつたばかり

こなた達は

- ・ たまに出ていくる（冷やかしや相談にのるときのみ）
- ・ 名前しか出てこない（話の中で出てくる程度）

のどちらかにしようと思つていこます

柊 かがみ

- ・ シンデレ
- ・ 純情
- ・ 何気にオタク
- ・ さみしがり屋

- ・突然の事などに弱い

日比野 龍

- ・見た目リア充のオタ
- ・一年の時かがみと同じクラス
- ・運動神経抜群
- ・格闘技の経験あり
- ・学力は普通
- ・中二病気味

- ・身長：176
- ・体重：63
- ・髪形：ワイルド

こんな感じで考えてます

## 設定（後書き）

みづやくテスト期間から抜けだし、書こうかと思つたんですが、なかなかインスピレーションがわからなくて書けません・・・

なので暫くこの話はお休みして違うのを書きたこと思こますm(—)

— ) m  
読んでくれて いる皆様す いません...

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3855m/>

[らきすた]かがみとイチャラブ[かがみん]

2010年10月9日13時20分発行